

農地が集団化し農道が整備することで運搬時間が少なくなる。
五、共同作業の実施への契機を作ることにできる。
例えば、一枚三〇〇円になった場合には二戸以上の所有者がある区画では作業の共同化が前提となり共同作業の契機を作ることがなる。

構造改善事業

熊本県の農業構造改善事業は、昭和三十七年度から事業実施に取り組み、今年で四十年目をむかえることになり、現在パイロット地区三地区が事業を実施し、一般地域で五十四の市町村が計画地区の指定をうけ、二十六地域が事業を実施している。パイロット地区と一般地域六地域はこの三月で一応事業を終ることになり、一部の市町村は再度実施に取り組むことにしている。これまでに、それぞれの地域の農業構造改善事業を認定する場合は、必ずしも農地集約事業を取上げているかを問題にし、どんなことがあっても農地集約事業は必ずやうけていたこととして、

ご存知のようにこれからの農業は、農地をまとめて大きな区画（三〇〇以上）にし、あらゆることにあって能率があがらなかつたこれまでの経営のしくみを改善して、機械を自由に使い、手間を省

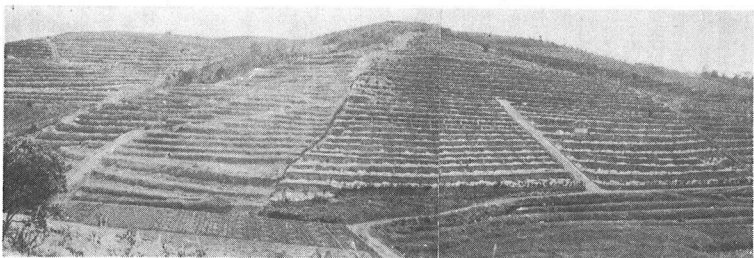
き、作業をしやすくすることが一番大切である。

農業構造改善事業ではこれまでに、およそ一、八五〇の農地集約事業を実施してきたが、要するにこの事業は、農家の皆さんの頭の切替えだけでできる事業であるから、これからも皆さんと話しあって、もっと多くの農地集約事業をすすめ、機械化された明るい、豊かな、農業づくりに努力したい。

果樹振興

今後産地間競争に打ちかつために大きく要求されるのは、果樹園の集団化であり、消費流通の近代化要求を加えて、産地体制の整備強化を十分に行なうことである。これがために県計画を主軸として市町村果樹団体等果樹園開発計画をもとに果樹園経営計画事業、農業構造改善事業、土地改良事業、近代化施設改善等の各種事業の総合的な運用をはかり、効率的な集団生産単位の育成を目的とする。果樹園の強化をはかり、将来は大集団の大型オートメーションの流通

そのため、社会的、経済的諸条件を調査し一集団単位は概ね四〇〇畝以上、一生産単位は一〇畝以上として、コストダウンのための附帯事業である農道、灌漑等の基盤整備と、防除運搬等の生産施設を併用して団地の強化をはかり、将来は大集団の大型オートメーションの流通



四日クラブが活躍

天草に「わけきり」という言葉がある。農地を親子兄弟でなくよく均等に分け合うことだが、実はこの「わけきり」が習慣となつて、非能率化へ追い込む結果となつている。城河原地区も多聞にもれず農地分散がはげしく、三十八年に農業委員会が交換分画計画を策定、推進委員会を結成して事業に乗り出した。さて選ばれた推進員の面々は、日夜会合と、説得活動の連続でタタタ。女性活動の頑強な反対。ク墳墓の地へ執着する老人層。プロローグと間違えられた推進員。辞表を提出する推進員も多く危うく座折かと思われた時期もあった。が、四日クラブが提出した新計画案で煩べたを叩かれ持ちなおしたという努力もあつた。にもかかわらず、推進員が結成して当初計画五十畝を一〇〇畝遂行。いよいよ第二次計画の突入し、成し、機械導入もグッドとできてきた。この畑作からいよいよ交換分画の効果が出てくると期待にはすむこの頃である。

▲天草郡五和町V

矢部町の南の端

集団化のトップバッター

▲上益城郡矢部町V

矢部町の南の端、千流川と五老ヶ滝川の深い谷に周囲をとり巻かれ、まるで険しい孤島といった感じの台地、大側部落といふ集落がある。有名な通潤橋の水でうるおされているこの部落は、農地集団化では県下でトップの矢部町のうちでも、最初に交換分画による農地の整備を成功させたところである。

環境といひ、農業形態といひ、一見古型の農村の典型を思わせるようなこの部落に、実は、驚くほどの、進歩的な意識が、しかもしっかりと生活のなかに根をおろしていることに注目したい。

例えば、部落共有の堂切り場があった。屋根を計く宣である。ここ、十年の瓦葺き計画で、屋根は瓦に交換してしまつた。あとは開墾して部落有の茶畑にしてしまつた。ついでに個人所有の茶畑も共同作業とし、共同製茶工場も作つた。昭和十一年である。現在、年間七千貫の取換をあげる。共同のナタ水榨油所、製茶所のはか一部落で保育所を作つたのはここが最初である。さて、大側部落での農地整備の発端

は、昭和三十年、矢部長高の学生たちによる農業経営実地調査である。四日間わたつて各各家に泊り込んだ学生たちは、耕作面積、ほ場の分散状況、栽培作物、農業収入など細かに分析、検討した。その結果、大側部落の場合、土地条件の劣悪さが、はつきり浮きだされた。

平均九十軒の水田は、十筆以上に分散、ひとりは何と二十六筆の水田畑であり、しかも離れ九団地に分散していた。また、農道は、牛でさえすれ違ふことができなかつたほど。さらに、特用作目茶と米とは、農繁期が重なり合ひ、労働時間は、どれほどあつても不足した。

農地の整理統合、農道整備による農業の合理化そして省力化以外に救済の途はないと、ぐらうた子にはつきり指摘されてみたと、さすがに部落の人たちも考えた。交換分画による集団化をやろう、と部落内の意志がまとまつたのはそれからまもなくであつた。父祖伝来の土地を交換し合おうというのである。並たいていな作業ではあるまいと考えた矢部町農業委員会は、

慎重に基礎調査から始めることにした。しかし、この心配は全く不要であつた。昭和三十一年の秋の夜、部落全体の話し合いが行なわれ、たつた一晩で交換分画の計画案は出来上つてしまつた。

一つの頃からこの大側部落の内に培かれていた民主主義の精神がこの結果をもたらしたのかも知れない。あるいは、過去の農作業がどんなに苦しかつたかを物語るのかも知れない。が、いずれにせよ、トップを切つた大側部落の、交換分画の成功が、その後矢部町各地の集団化に強力な推進力になつたのは事実である。

事業完了後の効果は、まず、総延長三千戸の農道である。全戸にテラ一がはいった。農道沿いに三〜四団地に集められたのは場、ごきげんな主婦たちを乗せて、テラーが走る。部落共同で雇ひしていた七名の備人はもうの外、タバコの増植、乳牛飼育増の外、土地が手に入れば、部落外でも耕作していいという人さえでて、労働時間の激減が物語つてくる。この大側の人たちの前向きな姿勢から、過去のかすみの実績が示すところ、それがかりと地についているだけに、今後の大きな飛躍が期待できるようだ。

主要果樹の面積、生産量の推移と長期計画

種類別	面積				生産量			
	32年実績	35年実績	38年実績	45年計画	32年実績	35年実績	38年実績	45年計画
温州みかん	1,289	3,793	6,973	12,900	185	23,656	37,976	42,629
かんきつ	424	410	550	1,400	158	1,400	521	2,273
その他	2,793	4,461	8,409	14,900	176	27,948	41,718	48,298
合計	3,882	6,591	12,649	20,000	158	36,300	53,412	58,692

遷果施設に包含することにして、現在果実連、信連、果樹同志等の団体の協力を得て推進中である。別表は、本県における果樹農業の推移を示すものであるが年間増加率は三十八年度において面積一・二五%を示し、なかでも栗の一・五〇%をはじめ温州みかん、甘夏かんが急速な伸びを見せ、長期計画に